

ありがとうちゃんの村

エリマキトカゲ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一話一話が短めです。この小説の発端は、友達とのラインでの私のくだらないボケ、ありがとうという場面で

「ありがとうちゃんの村」と言った私のクソリップを受け、小説書いてみ、と言われただけです。本当に初心者なので、色々と至らない点がありますが、温かい目で見守ってください。

目次

第一日目

第二日目

1

5

第一日目

今日も退屈である。今日もまた面白くないものである。日記の一行目がこのような文でいいものか。終わり良ければ全て良しとかいうが、私は始めも重要だと思う。始めがダメならあとダメ。ラストスパートに期待してもそれなりの成果しか得られない。ならばそう書けばいいのに。

嘘を書いてもただ罪悪感に晒されるのみ。ならば戦争だ！（？）

落ち着け私。鬱憤を晴らすためにわざわざ日記を買った訳ではない。さて今日あったことを記録するか。

あつ、名前を書き忘れていましたね。私、笑田笑子（しやうたえみこ）と申します。名前からして笑ってそうなのに、生まれてこのかた、1度も笑ったことなどございませぬ。だつて理解できないんだもん。なんで笑うのかなー。

みなさんまるで違和感丸出し、製作過程途中のCGみたいな顔して笑う。なんでかなあ。無理して笑う必要なんて微塵もないと思うんだけど。

「笑子〜」飯よく。ありがとうー！」

今日もありがとう言っているの？飽きないの？

「まさかあ、それがこの村での挨拶なもの。飽きるわけないでしょ？笑子こそ笑うべきなんじゃないの？」

嫌だよ、そんな機械みたいな感じの笑いをするのは。

「……………飯よ。早く来なさい。」

へいへい。

声色自体はかなり変化しており、怒っているのが丸わかりであるが、得意の営業機械スマイルは保たれたままである。多分普通に怒るよりも狂気に満ちており、(多分ね、今まで笑いながらしか怒られてないから。)単純に怖い。

笑子はさつさと部屋を出ると、そそくさと席に座る。今日の夕食はハンバーグだ。ニコニコマークに盛られたケチャップを見て、はあ、と盛大な溜息をつく。溜息をすると幸せが逃げていくとか言うが、私の場合は幸せの「し」の字すらないのでただの空気である。

「ありがとう！いただきますーすー！」

いただきます。ねえ、一言じゃダメなの？わざわざありがとう、とつける意味ある？

「文句言わない。ありがとうは最高の言葉よ。」

ああ、洗脳されている貴方にはこんなこと言っても無駄なんでしたね。

「さつさと食べなさい。」

食べてもすぐ戻すよ？

「なんでよ」

笑顔が気持ち悪いからだよ。あ、お父さんは今日どうするんだって？ ご飯は？

「今日はお勤めよ。」

どうやら今日は笑顔の布教活動に従事しているようだ。この村の八割のものはお父さんみたいに笑顔の布教活動をしている。具体的には村の外に出て、笑顔をまき散らす仕事。例え罵声を浴びてもニコニコし、ただひたすら笑うだけ。自分を偽っていて疲れないのだろうか。この村はストレス性腎不全でなくなる人が多い。バカみたいな話である。

結局もう話すことがなくなってしまった。いつものように無言が空間を支配する。まるで家が私を拒むような、よそよそしい冷たい雰囲気、心の中で舌打ちをする。

ご飯を食べ終わり、さっさと風呂呂に入る。足元に置いてあるニコニコマーク模様の足ふきマットの笑顔に思わず「消えろ」という言葉が出かかる。危ない危ない。そのような言葉はここでは御法度である。代わりにめいっばい踏みつけた。

風呂から出て、足ふきマットを踏みつけ、ドライヤーで髪を乾かす。今日もいつもと変わりない、白。私の生活は永遠に白なのだろうか。

○月× 日

今日も退屈である。今日もまた面白くないものである。夕食のハンバーグが割と美味しかった。風呂の温度がいつもと違った。そろそろ夏だからだろうか？

第二日目

今日もニコニコマークの天井に見守られながら目を覚ます。私はニコニコマークが嫌いである。しかし、この天井のニコニコマークはデザイナーが上手かったのか、まだ「まし」な方である。部屋は見回せば見回すほどニコニコマークに溢れているのがわかる。鉛筆や消しゴムなど、割と普通なものから、ケバケバしいピンクの下地に黄色いニコニコマークの「ださい」カーテンや、部屋の隅に置かれた埃をかぶった本棚の本の表紙まで。それらから目をそらそうと布団に潜り込めば、シーツや布団のニコニコマークが目に入る。

唐突だが、この村に義務教育というものは存在しない。数少ない「外」の本には学校とやらのことが書いてあったが、この村には生憎幼稚園しかない。もつとちゃんと勉強をしたいものである。

あ、でもここに学校なんて作ったらカオスになるわ……。ヤバイ、想像しただけで吐き気がする。

まあ私は本で勉強しているので同年代の子たちに比べては学のある方だと思う。じゃあ学校いらない…：か。

七分丈のジーンズにニコニコマークが描かれた服を着る。下着の柄？察してください。
い。

私はあくびをしながら階段を降り、洗面所でごしごしと顔を洗った。乾燥しやすい体質の私は、毎朝ローションを塗らないと肌がガツガサになる。ああ、面倒くさいわあ。

さて、これから第一ミッションの朝食に行こうと思う。朝食というのは、美味しさや楽しさによってその日の運勢を変えるといつても過言ではない。しかし、今のところ私が楽しく朝食を食べられたことは数えるほどしかない。朝食のあちこちに仕掛けられている「ニコニコトラップ^爆」は、私の気分を最悪にしてくれる。さらにひっきりなしにベラベラしゃべってくるババアがうるさいので、私の気分はどん底を超えて地獄行きだ。さて、今日の食事はどうだろうか。

食卓に着くと、まずピザトーストが目に入った。ニコニコマークのチーズはまあ、想像がつく。今日のメニューは爆弾入りピッツピッツアトーストとサラダ、そして油が乗っていて美味しそうなソーセージだ。流石にサラダにニコニコマークが入っていない。私はわざとピッツピッツアトーストの口の部分を大きく頬張り、ごしやごしやと噛んだ。牛乳を一口飲んで流し込むと、今度はソーセージにかぶりつく。しかし油断した。ソーセージの断面はぶん殴ってやりたいほどの満面の笑みであった。訳がわからない。肉詰めに何笑顔詰めてんだよ。もつと肉詰める。つてかこんな技術もつと他ん

とこ使え。

「笑子、おはよう。ありがとう！」

おそよー。

今日の私は寝坊気味。よって挨拶もおそようだ。今日のバアちゃん表情は…あ、やべ、これ頼み事してくる目じゃん…めんどくさあ。

私の勘は見事に当たる。彼女は口を開くと遠慮がちに、しかし目は大胆に私に話しかける。

「よかつたら今日、頼み事があるのだけれど。」

はい。

「買い物行つてきてくれないかしら？ありがとう！」

え「……………」やだ。

よりもよつて買い物ときたか。今日についてはいいないな。私みたいな変わり者は珍しいので、村中の興味の的である。まるで見ちゃいけないもののような扱いをされる。

いや、見なきゃいいじゃん。

しかし、今日のご飯が私のわがままで無くなってしまうのはごめんだ。私は極めて模範的でいい子なので、エコバッグを母さんからひったくると、サンダルを履いて表に出る。

表は閑静な住宅地である。ここは何故か現代的？な技術だけは発達しており、ほとんど関わりのない外の世界と同じくらい文明を持っている。

まだ朝の眠気の残る目を瞬かせて、早歩きでスーパーへ向かった。

「ねえ、あれって……」

「笑わずの子、だわ。」

今日もいつも通り私を噂する声周囲から聞こえる。小さい頃は理解できなかったその声は、今となっては私の日常と化している。

なぜ、私は噂されるの？

なぜ、みんな笑っているの？

ああ、そうだ。私が他と違うから――

なぜこんなにも単純極まりないことを理解することができなかったのだろう、と胸の中の幼い自分を嘲笑いながらスーパーに入店する。頼まれた野菜や肉を無表情でカートの中に入れる。その間にも私を噂する声は聞こえる。うるさいうるさい。何なの？

「2145円になります。領収書はいりますか？」

「いえ、結構です。」

すつかり重くなったエコバッグを持ち、家へ帰る。足取りが行きより心なしか重くなったような気がする。荷物が重いからだろうか？

きつと、そうに違いない。そう思いたい——
「おかえり」

いつもは嫌っているはずの母の「おかえり」と言う言葉でさえ優しく感じる。

ああ

誰か見ているのか。見ないで欲しい。わたしは変わっていない、ごく普通の人——
「私はわたし、貴方はあなた」

悪魔がそつとわたしに囁いた気がした。